

3. 大正・昭和期徳島の海外留学生～東亜同文書院で学んだ県人～

荒武 達朗

はじめに：東亜同文書院について

東亜同文会は近衛篤磨を会長として日清戦争後に結成された。この東亜同文会が1901年、上海に開学したのが東亜同文書院である。初代院長には根津一（ねづ はじめ）が就任し、教育と事業の拡大に当たった。東亜同文書院は第20期（1920年入学）までは3年制、第21期からは4年制に変更され、第40期（1939年入学）より大学に昇格し、第46期（1945年入学）を迎えたところで敗戦、事実上閉校した。その後、書院大学の教職員有志が中心となって設立されたのが愛知大学である。この東亜同文書院に関しては現在日中の多くの研究者によって研究が進められている⁽¹⁾。

この東亜同文書院が今日においても注目を集めるのは、主に中国大陆で活動する実務者を養成したという同校の特徴のみならず、その実施するユニークなカリキュラムにある。当時の日本では文語体を中心とする漢文教育は盛んに行われていたが、口語（いわゆる白話）に対する関心は高くはなかった。これに対して書院では日中交流の拡大という趨勢を踏まえ、徹底した中国語（北京官話）の習得、ならびに商慣習など実用的な科目の教育を行うことを重視していた。さらに特筆すべきは書院学生による「大旅行」の実施である。1905年入学の第5期生が3年生となった1907年以降、同文書院の学生は自ら計画、準備をすすめる、グループを組んで中国各地へと旅立つこととなった。この大旅行は時に数ヶ月の旅程に及ぶ書院生の調査・研究を兼ねた卒業旅行と位置づけられた。この後、1919年にベルサイユ講和会議に端を発する五四運動と反日運動の盛り上がりにより途中で断念した1919年を除き、戦時中の1943年まで継続した。旅行コースは全部で約700にのぼり、中国本土をほぼカバーし、一部は東南アジアやロシア、朝鮮、台湾にまで及んだ。彼らの残した大旅行誌と調査研究は20世紀前半の東アジア・東南アジアを網羅し、社会・経済・教育・慣習などの研究にとって貴重な資料となっている⁽²⁾。

松谷昭廣によれば、東亜同文書院に入学する学生は各府県の派遣する給費生を中心としていた。特に1914年入学の第14期以前は私費で入学する者はほぼ見られない。1920年代に入る頃にはほとんどの府県が学生を派遣するようになった。府県によっては留學生の派遣に対して強い期待を寄せており、九州各県の例に拠ると長崎県では産業界、熊本県では地方政党的の国権党が派遣を推進し、留學生に中国の商業事情を報告するように求めていた⁽³⁾。基本的に各県3名を募集枠と設定されていたが、実際はより多くの学生を派遣する県もあった。各府県では中学校を卒業した優秀な学生が受験したため競争率も高かった。例えば熊本などでは競争倍率が10倍前後であったと言われる。府県費生の選抜は各府県が行い、学

科試験・口頭試験・体格試験が課された。学科は国語、漢文、作文、地理、歴史、英語などから 3 科目程度が実施されたという⁽⁴⁾。

東亜同文書院の本来の学費は月額 50 円と非常に高額であったが、府県費生には各府県から授業料と小遣い週 1 ドルを給付された。学生とその家族にとって経済的負担の低い書院への留学は、狭き門ではあったものの、海外へと雄飛し未来を切り拓く道の一つとなった。今から 100 年前、このような志を持った中学生（現在の高校生）が日本に存在したこと、そのような機会を各府県が提供していたことは注目に値する。

本稿の扱う徳島県においては明治 35 年度（1902 年度）より「毎年留学生二名を派遣し其の学資金旅費及旅装手当等を支給し来りしが、大正三年度（※1914 年）よりは貸費の方法に改めたり」というが、全体としては「本県施設の育英事業にして共に其の成績良好なり」という評価を得ている⁽⁵⁾。前掲の松谷は各県、各期ごとの卒業生を整理しているが、徳島県出身の東亜同文書院生は第 2 期の 2 名が最初であり第 43 期まで 69 名を数える。本県でも東亜同文書院への留学が優秀な学生の進学先として認知されていたのである。

本稿では徳島の外へと目を向けた人びとに対する認識を深めるべく、まず東亜同文書院県費留学制度が本県でどのように開始され運用されたかを概観し、その上で留学生の具体例を紹介することとする。

第 1 節 徳島県の県費留学生：第 2 期生の募集

東亜同文書院の出願条件は尋常中学校卒業生またはこれと同資格を有する商業学校卒業生とされた。19 世紀末から 20 世紀初にかけての徳島県を例に取れば、徳島中学校（1878 年創立、現、城南高校）、脇町中学校（1896 年創立、現、脇町高校）、富岡中学校（1899 年創立、現、富岡西高校）、撫養中学（1908 年創立、現、鳴門高校）の各中学校卒業生がそれにあたる。本節では『徳島毎日新聞』の記事に基づき、この東亜同文書院による徳島県での募集活動の実態を概観する。引用史料はすべて文末にまとめて掲載した。

東亜同文書院の第 1 期生は明治 34 年（1901 年）に入学し、1904 年に卒業した。この第 1 期生卒業生 59 名の出身地は北海道、宮城、秋田、福島、茨城、栃木、長野、新潟、富山、福井、京都、兵庫、岡山、広島、愛媛、高知、福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、鹿児島県の 22 県であり、徳島県は含まれていない。徳島での募集が始まるのは明治 35 年（1902 年）入学の第 2 期生からである。この第 1 期生が入学した年に院長の根津一は精力的に各地を遊説し各府県に留学生派遣を呼びかけた。『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 23 日の記事によれば【史料 1】、10 月 22 日の京都から 12 月初旬の高知まで、約 40 日の間に 21 都市を巡る旅程である。徳島には京都、大津、奈良、三重、和歌山の次、10 月 29 日に到着予定であった（この段階では講演会開催の日程は不明）。

根津院長の来訪の報を受けて、翌 10 月 24 日の『徳島毎日新聞』に「支那留学生派遣の急務」と題する長文の社説が掲載された【史料 2】。その内容は大略次の通りである。書院へ

の留学は外国語の習得と中国の実情の把握、政治経済の学習にとって有益である。日本は中国と密接な関係を有しているが、同時に日本人の関心は低く、中国語を習得する者も少ない。留学は国家・個人双方にとって有意義であり、所要の費用も低く抑えられるので積極的に応募すべきである、と。本稿の「はじめに」で言及した松谷の研究は、長崎では産業界、熊本では地方政党が書院の留学制度に強い関心を向けていたことを明らかにしている。一方徳島では特定の団体が推進するという傾向はこの後も見ることはできない。同日掲載の別の記事は県の教育者その他有志者に対して聴講を促している【史料 3】。

根津院長は和歌山から徳島へ、そこから香川に向かう予定であった【史料 1】。徳島での行動日程は10月29日に来県、1泊した後に30日午後1時より徳島師範学校（現、徳島大学総合科学部）にて書院生募集と中国情勢の2点について講演を行う、というものであった。県庁では各郡市長と県立学校長に対して、市役所では市民の有志者にその周知を図った【史料 4】。

ところが10月29日、風波による時化のため出航が延期、根津院長はやむなく30日午前5時の兵庫発の船で徳島に向かった。船は11時20分に徳島に入港し、一行はいったん中通町の平亀楼にて小休止した【史料 5】。午後1時開始予定の講演は2時間遅れ、徳島師範学校講堂にて3時より行われた。列席者は県会議員、実業家、官吏、師範学校教職員ならびに師範学校と中学校の学生たち300名余りであった【史料 6】。講演後、根津院長は次の目的地である香川に向かうべく、夜の便で兵庫へと引き返した【史料 5】。彼の遊説が過密なスケジュールで行われている様が看取される。夜に徳島から隣県の香川に向かうに当たっては、一度神戸へと戻りそこから香川に向かう方が便利であったようだ。当時の四国内の交通事情についてその一端を垣間見ることができよう。

この講演の概要は「清国の形勢」と題し『徳島毎日新聞』に10月31日、11月1日、3日、4日、6日、7日、9日、10日と8回にわたって連載された（【史料 6】は第1回目の冒頭部分。11月4日掲載の第4回は徳島県立図書館所蔵分欠号のため未見）。その内容は義和団事件から説き起こし（第1回～第3回）、張之洞・劉坤一らの上奏（第4回～第6回）、光緒新政の開始（第7回）と、1900年から01年にかけての中国情勢を論じている。さらに中国の政治経済における上海の重要性を述べ、当地に設置された東亜同文書院の概況を説明し（第7回～第8回）、「兎に角此際日本の官民は一致して支那の開発改革に助力を与へ露西亜をして妨害を加へざらしめんの策を執るに勉められんことを望む」と講演を結んだ。

この根津院長の来徳の後、徳島県では東亜同文書院県費派遣留学制度の制定に向けて、本格的に動き始めた。12月15日の記事によれば、県費留学生派遣の為の予算編成も始まり、予定では明治34年度の追加予算、並びに翌35年度の予算にも計上されることとなった【史料 7】。翌、明治35年（1903年）2月6日には県令7号として13条からなる「東亜同文書院留学生規則」が公布され、派遣学生の募集が始まった。第1条応募資格、第2条給付金、第3条選抜方法というように詳細が定められ、併せて「願書」「誓約書」「到着届書」「留学始末書」の各様式が末尾に掲載された⁶⁾。この規則の公布された2月6日の『徳島毎日新聞』

の記事は受験資格についての注意を次のように伝えている。2月6日の規則の公布により、採用試験の実施が近日中に見込まれるが、本年3月に卒業予定の学生（中学5年生、16～17歳）にも受験資格があるということが改めて確認された【史料8】。なお留学生の派遣は4月であるため選抜は速やかに行わねばならない。2月14日の記事は試験が今月、つまり2月中に実施されるかもしれないという非常に慌ただしい日程で行われると報じた【史料9】。その1週間後、2月21日の記事【史料10】と翌22日の記事【史料11】によれば、この段階でようやく願書締切が2月末日、選抜試験実施が3月5日に決したことが判明する。いずれにせよ要項の公表から出願締切までが2週間もなかった。受験生は2月6日公布の上記規定に基づき必要書類を提出するよう要求された。

この過密な日程故か、県民の反応は芳しくない。願書提出締切前日の段階で、募集2名に対して志望者は6名に過ぎなかった。試験問題出題者も2月末に徳島、富岡、脇町の各中学校から英語、国語漢文、歴史地理の教員が任命された【史料12、13】。2月28日の記事はこの不振について中学以上の学歴を求める者は資産を有しているのに奨学金は必要がない、海外留学への応募が父兄の賛同を得がたい、という理由を述べている【史料13】。だがおそらくは要項の公布からの日程が短かったことと初年度による周知不足も関係していると推測できる。

試験は予定通り3月5日に実施され、3月17、18日頃に合否の発表を行うと伝えられたが【史料14】、この見込みからはやや遅れ、合否は3月27日に公表された。板野郡出身の小路氏と徳島市出身の鎌田氏の2名が選抜され、翌4月には渡航の準備を整えて徳島を出立することとなった【史料15】【史料16】。かくして彼らの東亜同文書院生としての生活が始まった。

第2節 3人の徳島県出身書院生：熊野正平・尾崎庄太郎・砂川健治

1. 徳島出身東亜同文書院生

本稿冒頭で述べたように徳島県出身の東亜同文書院卒業生は第43期まで69名を数える。本節では徳島県出身の東亜同文書院生を概観し、その中から比較的詳細が判明する具体例を紹介する。まず前掲徳島県教育会編『徳島県教育沿革史』（以下『教育史』と略記）および大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』（以下『大学史』と略記）⁷⁾より徳島県出身者をまとめる。前者の資料には明治35年（1902年）入学・明治38年（1905年）卒業から明治44年（1911年）入学・大正4年（1914年）までの県人の名簿と就職先が掲載されている。後者の資料は東亜同文書院ならびに東亜同文書院大学の学校史である。その第五編「回想録」第一章「各期回想録・銘々伝」にはそれぞれの期に属する学生の本籍と卒業後の経歴を記載している。ただし期によっては記録と記憶の不備による欠落と誤りが見られる。

まず『教育史』に基づいて1902年入学の第2期から1912年入学第12期までの留学生を整

理する。『大学史』と記述に異同がある場合は併記する。

第 2 期 1905 年卒

小路眞平 東京株式会社九江出張所 『大学史』によれば天津中和洋行から大倉商事
鎌田芳雄 三井物産上海支店 『大学史』によれば芝罘支店

第 3 期 1906 年卒

後藤田富賀美 日清汽船上海支店 『大学史』は“後藤”と誤記 日本棉花
三木甚平 上海旭商会 『大学史』によれば母校の助教授

第 4 期 1907 年卒

内田茂二 支那事情研究 『大学史』では北支那毎日新聞 広中一成の研究（後述）
荒岡 清 天津東華公司

第 5 期 1908 年卒

飯田重太郎 湯浅洋行 / 谷 清 南満洲鉄道株式会社

第 6 期 1909 年卒

富永実夫 二六新報社
栗田 実 義州府庁 朝鮮総督府通訳生

第 7 期 1910 年卒 長谷 董 漢口居留民団事務所

第 8 期 1911 年卒 谷 幾郎 三井物産会社 満洲公主嶺

第 9 期 1912 年卒 仁木孝一 太秦商会 上海 / 岩城愛輔 上海商務官庁

第 10 期 1913 年卒

正木頼一 上海日清洋行
増谷太一 日清汽船鎮江 『大学史』では後に福和公司社長、上海で義泰洋行自営
を経て、戦後は日本生命

第 11 期 1914 年卒 辻善三郎 不明 / 勝浦文昌 九江伊藤商行にて補習科研究

第 12 期 1915 年卒 福島喜一 『大学史』によれば三井を経て九大入学、判事となり満洲
国で高級裁判官、後、弁護士、戦後は徳島で市議会議長

1913 年入学の第 13 期以降については『教育史』には記載がない為、以降の記事は『大学
史』による。

第 13 期 1916 年卒 中山二郎 京大法学部、弁護士をへて同文書院教授

第 14 期 1917 年卒

木内 一 三井から大同コンクリート
元木文人 大阪井上商事

第 15 期 1918 年卒

河野和一 伊藤忠、後、福岡に材木商「南洋商会」

雑賀広克 三井銀行から帝国銀行、戦後 福德相互銀行

岡田進一良 台湾総督府専売局、戦後、画報日本社

第16期 1919年卒 田上武雄 戦後、張家口付近で行方不明

第17期 1920年卒

熊野正平 書院教授。戦後一橋大学、二松学舎『熊野中国語大辞典』を編纂

広岡 謙 又一の取締役

瀬部伊三郎 岩井産業 後、日中貿易の開拓に当たる

片山頼三 徳島鉄工所会長、徳島市議会議長、商工会議所会頭

第18期 1921年卒

田村省七 日本紙業。戦後、京都伊藤紙工常務

梅林寒月 日清汽船、最終職は東亜海運漢口支店

第19期 1922年卒

久米幸延 台湾専売局、戦後は大和樟脳社長

恵美芳一 日本棉花から日綿実業、日本木材輸入協会大阪支部

第20期 1923年卒 小川理 横浜ゴム / 中山進 満鉄派遣生。会計検査院に転出

以下、第21期より書院は4年制に改組された。

第21期 1925年卒

第22期 1926年卒

第23期 1927年卒 大久保巖

第24期 1928年卒 木村仁郎 田附商店、三井生命を経て渡満。戦後、大興商会

第25期 1929年卒

第26期 1930年卒

尾崎庄太郎 満鉄北支経済調査所 戦後中国研究所理事

遠藤章三郎 鐘紡、外務省通商局、國學院、東洋大学講師

第27期 1931年卒 加藤隆徳 日紡 青島工場

第28期 1932年卒

第29期 1933年卒 桜川影雄 京大を経て同文書院教授に就任

第30期 1934年卒

第31期 1935年卒 大石明信 住友商事 / 中山昌生 東棉

第32期 1936年卒 岩佐元明 三井物産

第33期 1937年卒 筒井 司 東棉

第34期 1938年卒

長島竜之助 徳島 43 連隊、ビルマ戦線へ

橘 清志 毎日新聞北京支局

第 35 期 1939 年卒

砂川健治 伊藤忠から台湾軍。南方へ出征。戦後、徳島相互銀行、昭和 46 年社長

第 36 期 1940 年卒

坂東 薫 大一建設社長

岡 正住 通産省から日本貿易会理事

増田末一 貿易商

第 37 期 1941 年卒

平田 剛 満洲炭鉱、シベリア抑留を経て、戦後、徳島市役所

斎藤信幸 東辺道開発、抑留生活を経て、戦後、神戸製鋼

第 38 期・39 期 1941 年 42 年卒 ※戦時下による繰り上げ卒業開始 以下省略

2. 熊野正平・尾崎庄太郎・砂川健治について

以上の徳島県出身東亜同文書院学生は明治 35 年（1902 年）より戦後まで毎年数名派遣され、卒業後は経済、政治、学術、メディアなど各方面の職業に就いた。その中の何人かは徳島へと帰郷している。ここでは卒業生の中から経歴がある程度判明する 3 人の人物を紹介する。第 4 期生の内田茂二（那賀郡坂野村大字大林村の生まれ）についてはすでに広中一成によって略歴が紹介されているので詳細は割愛する⁽⁸⁾。また第 17 期生の片山頼三については横山春陽『誇りの阿波路』徳島新聞社、1948 年、『徳島県人事興信録』関西人事興信局、1953 年に簡単な概況が記されている。

a 第 17 期 熊野正平

熊野は明治 31 年（1898 年）富岡町に生まれた。大正 6 年（1917 年）旧制富岡中学校を卒業後、東亜同文書院に入学し、卒業後はいったん就職してから大正 11 年（1922 年）に同文書院の助教授に迎えられた。昭和 17 年（1942 年）に帰国し、東京商科大学専門部教授となった。戦後、同校は一橋大学に改組、同時に社会学部の中国社会論の教授となった。昭和 37 年（1962 年）に退官、昭和 57 年（1982 年）に死去した。

熊野正平は清末の政治思想に関する論文を多数執筆しているが、中国語教育や中国情勢についての著作も刊行している。中でもその没後に刊行された『熊野中国語大辞典』三省堂、1984 年は、東亜同文書院の残した語彙カードを基に編纂したものであり、高い評価を得ている。故郷の阿南市立那賀川図書館には平成 10 年（1998 年）に熊野正平生誕 100 年を記念して「熊野正平先生顕彰コーナー」が設けられた（図参照）。



b 第26期 尾崎庄太郎

彼は詳細な自伝を残している。尾崎庄太郎『われ、一粒の麦となりて』桐原書店、2007年によれば、尾崎は明治39年（1906年）板東村に生まれ、人より2年遅れて旧制撫養中学（1906年設立、現、鳴門高校）に進学した。その後東亜同文書院に学ぶが、在学中に見た中国の現状は彼を左翼運動へと向かわせることとなる。卒業後、徳島の知人の紹介で就職するも、プロレタリア科学研究所での活動に従事し、昭和7年（1932年）に検挙投獄された。昭和10年（1935年）出獄後上海へ渡り、満鉄調査部などに勤務、調査研究活動に従事しつつ、反戦運動に身を投じた。昭和17年（1942年）に再度検挙され、敗戦まで獄中生活を送った。戦後は中国研究を行う中国研究所設立に尽力し理事に就任した。尾崎は多数の著作を刊行しているが、中でも『毛沢東選集』の翻訳に従事したことが知られる。平成3年（1991年）に死去した。

尾崎はその伝記の冒頭で故郷の板東村の情景、お遍路さんとお接待、撫養中学での生活、中国に興味を覚えた契機が述べられている。中学4年生の終わりか5年の初めに学校側から東亜同文書院の受験を勧められ、大正14年（1925年）12月に東亜同文書院の受験を決意、翌年1月に受験した。3月、小松島で徴兵検査を受け、出発。神戸から上海へと向かい、そこから書院生としての生活が始まった。伝記からは折に触れて徳島に帰郷し家族と交流した記憶が語られている。

c 第35期 砂川健治（旧姓 渡邊）

砂川の略歴については、『徳島銀行八十年史』には彼が徳島銀行の役員に就任していた期間が記される⁽⁹⁾。その他については目下、詳細不明である。ただし彼は雑誌『徳島の文化』などに幾つか文章を発表している。その中で東亜同文書院について次のような回想と印象を残している。

「私は昭和十四年の春、同文書院を卒業した。学校の生活は一年生から四年生まで約四〇〇人が全員寮生活である。二年間は一年間、同郷の一年生の中国語をミッチリ仕込む事になっている。私達は、阿片戦争以来西欧諸国から圧迫されている中国を同じ亜細亜の民族として支援せねばならない。これが建学の精神である。そう教えられて来た。

.....

戦後日本に帰って後輩の大城立裕君（書院四十四期生 沖縄県）の書いた『朝、上海に立ちつくす...。小説東亜同文書院』を読んで考えさせられた。我々が信じ込んでいた建学の精神は日華事変以来第二次世界大戦を通じて無残に踏みにじられている。同じ釜の飯を食った同窓の台湾人、沖縄県人、韓国人の中に極めて強い民族意識が潜在していた事をその小説は物語っている。『書院の生活はあれでよかったのか』。そういう疑問が自然と湧き起こってくるのをどうする事も出来なかった。もう一度中国の大地をしっかりと踏みしめて考え直してみる必要はありはしないか。.....」⁽¹⁰⁾

砂川は書院を卒業して10ヶ月後に出征した後、「中国との縁はプツリと切れてしまった」という。戦後は徳島に帰り、徳島相互銀行（徳島銀行）に就職、昭和46年（1971年）に社長、その後会長に就任した。「戦後銀行の役員として北京や桂林に旅行した事はあるがそれは飽まで観光旅行」であった。この文章を著した頃は徳島県美術家協会会長を務め徳島の文化事業の発展に貢献している。

おわりに

20世紀前半、各府県の中学生にとって東亜同文書院への留学は海外で学ぶ数少ない機会の一つであった。本稿で見てきたように徳島においてもそれは例外ではない。中学校を卒業した若者が進学先として書院を選び、敗戦時までには県出身の卒業生は約70名を数える。なお東亜同文書院への留学が始まった20世紀初頭の徳島において植民地の台湾や朝鮮への移住ブームも盛り上がりつつあったことも見逃せない事実である⁽¹¹⁾。もちろん日本帝国の対外拡張という時代的背景の下であったが、徳島の人びとが県外へ、海外へと視野を広げる気運が高まっていたと言える。

また子弟の留学が各府県への海外事情の伝播という意味を持っていた点も指摘しておきたい。徳島県の事例を紹介すれば、『徳島毎日新聞』大正4年（1915年）4月21日には木野生「煙雨楼台：上海より南京へ」と題する東亜同文書院の学生執筆の記事が掲載されている。1915年は第一次世界大戦中、日本が中国のドイツ租借地青島を攻略し、中国政府に対し

てドイツ権益の継承を要求（対華 21ヶ条要求）した年である。これを契機として中国での抗日運動は高まることとなった。

「日支交渉でウンウン騒ぎ返っていて、茲上海では生意気千万にもチャン先生共排日的大運動を開始し.....。

その時見聞したことを次につまらぬ僕が筆取って書かうと思ふからである。幸ひに一瞥を垂給ふならば仕合せの至りである。」

現在では対華 21ヶ条要求は日中関係の悪化、諸外国の猜疑を招いたものとして評価されている。だがこの記事には事件の本質への洞察は感じられない。反対に“生意気千万にもチャン先生”という下りからは中国に対する優越感が看取され、当時の日本人の対アジア観を表現している。その見解の是非、“排日”と称されるナショナリズム運動に対する理解の妥当性は措くとしても、書院学生の見聞が日本国内の地方新聞に掲載されたという事実は注目に値する。これらを通じて人びとはリアルな中国情報に接し、また東亜同文書院の存在を知らしめることとなったのである。

史料編

※漢字はすべて常用漢字に改め、適宜句読点を補っている。

【史料 1】

東亜同文書院長根津一氏の遊説すべき地方及滞在日割は凡左の如き予定なりと本社へも通知ありき

京都（廿二日） 大津（廿三日） 奈良（廿四日） 三重（廿五日廿六日） 和歌山（廿七日廿八日） 徳島（廿九日） 香川（卅日卅一日） 岡山（十一月一日二日） 広島（三日四日） 愛媛（五日六日） 山口（七日八日） 鹿児島（十二日十三日） 熊本（十四日十五日） 長崎（十六日十七日） 佐賀（十八日十九日） 福岡（二十日廿一日） 大分（廿二日廿三日） 萩（廿四日廿五日） 松江（廿六日廿七日） 鳥取（廿九日三十日） 高知（十二月三日四日）

「根津氏の遊説日割」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 23 日

【史料 2】

東亜同文書院長根津一氏は、各府県より支那に設置せる同院へ、留学生の派遣を勧誘すべく遊説中なり、而して本県に来るは、月の廿九日なりと報ぜらる。.....。

外国語を我国に於て学ぶは其進歩極めて遅く、外国に赴て其国語を学ぶは極めて速かに、且つ巧みになることは、其道の経験家の一致したる通論なり。左れば迅速且巧妙に支那語を学び、支那の情況を知り、併せて政治若しくは経済の学を学ばんと欲する学生に取りては、極めて便益なる学校なり。予輩は根津氏の演説を機とし、有志者は進んで其子弟を派遣し、子弟も亦奮ふて留学せんことを望や切なり。.....。

今や隣国支那は、政治上、外交上、通商上、我と極めて密接の関係を有し、且つ列強の競争の焦点と為れり。而して本邦人たる者、此密接の関係を有する支那の国状を知らず、其国語を解せざる為め、世界の戦争過程に於て、我政治外交の上に於て、我通商貿易の上に於て、非常の不利益を被りつつあるなり。.....。

是時に当り、幸にして東亜同文書院の設置あり、其留学生派遣の勧誘を為す、本県人士たる者、之を国家の為めに謀り、之を個人の為めに計り、大利ありて小害なきことを覚知し、大ひに奮ふて支那留学生の派遣を勧誘し、其实行を促すべきなり。況んや其留学費用たる、東京に游学すると大差なく、欧米留学の如き多額の経費を要せざるに於てをや、費す所少なくて得る所多し、豈一挙兩得の名策にあらずや。.....。

「支那留学生派遣の急務」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 24 日

【史料 3】

根津東亜同文書院長は来る廿九日同院入学生募集勧誘の用務を帯びて来県せらるる旨は前号に報道せしが、県庁に於ては同氏着県の上は教育家其他有志者の集会を催し氏に一場の講話を請ふ予定なりと。

「根津東亜同文書院長」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 24 日

【史料 4】

東亜同文書院長根津一氏廿九日来県につきては卅日午後一時より徳島師範学校に於て同院生徒募集及び支那内地の形勢につき談話せらる可しと、右につき県庁にて各郡市長県立学校長等に対し参聴勧誘の事を照会し、市役所にては市内有志等に参聴を勧めたり。東亜の形勢日に非なる今日、氏の講話は蓋し聞きものなる可し。

「根津氏の談話会場」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 29 日

【史料 5】

東亜同文書院長根津一氏は東亜同文会学生募集委員和田三夫氏と共に昨日午前十一時廿分入港の汽船にて来県、中通町平亀楼に入られたり。一行は廿九日の昼航海船により同夜来着の筈なりしも海波荒く、昨朝五時兵庫を出発せしものにて来着後小休の上、師範学校に於て談話を試み、昨夜出校の汽船にて直に兵庫に引返しそれより香川県に向はるる筈なりき。

「根津東亜同文書院長の来県」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 31 日

【史料 6】

昨日午後三時より徳島師範学校講堂に於て東亜同文会幹事長根津一氏の二時間余に渉る演説あり。会する者県会議員、実業家、県属、市吏員、師範学校職員、師中両校生徒等無慮三百四名、席定るや小笠原県会議長根津氏を紹介す可く一條の談あり。次で根津氏は左の如き主旨の演説を為して全く閉会せしは午後五時なりし。

「清国の形勢（一）」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）10 月 31 日

【史料 7】

本県会の建議にかかる東亜同文書院へ留学生二名を県費にて派遣の事に対しては、県庁主務課に於てそれぞれ調査中なりし処、此程調査成り予算の編製を終りし由にて、近日第一課に送附の手續に至る可く、されば明治三十四年度予算追加、及び卅五年度予算として県参事会の審査に附するも遠きに非ざるべし。

「東亜同文書院留学費の提案」『徳島毎日新聞』明治 34 年（1901 年）12 月 15 日

【史料 8】

東亜同文書院留学生規則は愈々発せられ、其志望者に対する採用試験は不日執行せらるる筈なり。左れば之によりて同書院に留学せんとの希望を抱く中学校卒業生蓋し多からん。然るに本年三月に於て本県中学校を卒業する者は（即ち目下尚ほ中学校第五年生たる者）該留学生志望者として試験を受くるを得べきや否や、此事に関しては本県庁にても曩に同文書院の意見等をも照会したる由は曾て記載せしが、本県庁にては現に中学校に在学する者と雖も本年三月の卒業試験を経て中学校の課程を卒る者には既に卒業したる者と同一に取扱ひ志願者たる資格を与ふる事と決定し、只本年卒業すべき者は在学中の学校長より其旨の証明書を得るを要する筈にて、毎年此例に拠る可しとなり。

「東亜同文書院留学生と本年の中学卒業生」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）2 月 6 日

【史料 9】

東亜同文書院留学生派遣の事につきては既に県令を發布せられ、来四月には派遣せざる可からざるが、右につきては余日も少き事とて本月中には採用試験を行ひ、其派遣生を定めざる可からず。.....。

「東亜同文書院留学生採用試験」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）2 月 14 日

【史料 10】

募集に就きては志望者は本月末日までに願書を提出すべし。 選抜試験は来月五日県庁にて執行す。

「東亜同文書院留学生」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）2 月 21 日

【史料 11】

来四月県費を以て派遣せらるにつき東亜同文書院留学生二名の募集につきは此際志願者は本月末までに願書を提出すべき筈なる事は既報の如くなるが、県庁にては本年県令第七号第一條に該当者には本月二十八日まで、同第九條の書類を県庁に差出す様示されたき旨を各郡市長に照会し、尚ほ其詳細の事は二十一日の新聞教育事項欄に就きて知る可しと申添へたり（前号参照）。

「東亜同文書院留学生募集」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）2 月 22 日

【史料 12】

東亜同文書院県費留学生たらんとするものは本月末日までに願書を提出すべき筈なるが、昨日までに於ける該志望者は未だ五六名に過ぎざる由、但し本月末日までには尚ほ多少の志望者を見る事なる可し。 右につき県庁にては一兩日中に試験委員の任命をなす可く、其委員は中学校教員中より採る可しと。

「東亜同文書院留学生試験」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）2 月 27 日

【史料 13】

本県々費を以て派遣す可き東亜同文書院留学生志望者の少き事及び試験委員任命の事は前号の紙上に報道せし如くなるが、昨日に至るも願書を提出したるもの六名に過ぎず、而して願書提出期限は本日限りなれば、此上或は多少の増加あらんも測られざれど、到底多数の志望者はこれ無き事ならん。 其原因は種々あるべきも中学校へ入学せしめ尚ほ高等の学科を修めしめんと欲する程の者は相当の資力を有し県費生たる必要なきと、一は上海とは云へ兎に角海外への留学なれば父兄の賛同を得難きによる可し。 而して該留学生試験委員は愈々左の諸氏に任命ありたりと。

英 語 徳島中学校教諭 田村喜作
 国語漢文 富岡中学校教諭 渡邊恕之允
 歴史地理 脇町中学校教諭 天海隆

「東亜同文書院留学生と試験委員」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）2 月 28 日

【史料 14】

東亜同文書院留学生選抜試験は一昨日終了したるが、其結果を發表せらるるは来十七八日頃なる可し。而して今回の試験は啻に学科の成績のみによらず、其人物の点に於ても大に留意し最も慎重に選抜を行ふ筈なりといふ。

「東亜同文書院留学生發表期」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）3 月 8 日

【史料 15】

東亜同文書院留学生は来月早々に派遣せざる可からず。左れば本県に於ける県費留学生の採用試験も採点調査略々終り、兩三日中に發表せらる可し。今回受験者の成績は概して好良なるも中には各科平均点にて及第点を得しも学科による及第点に達せざる一二人ありといふ。

「東亜同文書院留学生發表期」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）3 月 25 日

【史料 16】

東亜同文書院県費留学生採用試験の結果は二十七日頃發表せらるへしとは既報の如くなるが、愈々左の二氏に決し、昨日を以て本年二月県令第七号に依り、同留学生を命ぜられたり。

板野郡堀江村大字西馬詰村 小路直平

徳島市大字寺島町 鎌田芳雄

「東亜同文書院留学生發表」『徳島毎日新聞』明治 35 年（1902 年）3 月 28 日

(1) 東亜同文書院にかかわる著作は一般書を含め数多く出版されているが、ここでは割愛する。書院を前身とする愛知大学では東亜同文書院大学記念センターが併設され顕彰を行っている。

<http://www.aichi-u.ac.jp/orc/>

(2) 藤田佳久の一連の業績を参照されたい。また加納寛『書院生、アジアに行く：東亜同文書院生が見た 20 世紀前半のアジア』あるむ、2017 年が大旅行誌をめぐる最新の研究成果である。

(3) 松谷昭廣「東亜同文書院への府県費生派遣：1900-20 年代を中心として」『日本の教育史学』45、2002 年参照。

(4) 前掲松谷、2002 年。また佐々木享「東亜同文書院入学者の群像：海を渡って学びに行った若者たち」『同文書院記念報』11、2003 年参照。

(5) 徳島県教育会『徳島県教育沿革史』徳島県教育会、1920 年、1324-1326 頁。

-
- (6) 「徳島県県令第7号 東亜同文書院留学生規則」『徳島県報』明治35年(1903年)2月6日。同資料は徳島県立図書館所蔵。
- (7) 大学史編纂委員会『東亜同文書院大学史』滬友会、1982年。
- (8) 広中一成「内田茂二(東亜同文書院第4期生)の華北硝石資源調査」『オープン・リサーチ・センター一年報』5、2011年参照。
- (9) 80年史編纂委員会編『徳島銀行八十年史』徳島銀行、1998年。
- (10) 砂川健治「シルクロード紀行」『徳島の文化』6、1988年。この他、砂川は同誌の1号、1982年と4号、1984年に巻頭言を著している。
- (11) 荒武達朗「明治末年徳島県における台湾移民の送出：北海道、朝鮮そして台湾」『文明 21』38、2017年、後に塩山正純『20世紀前半の台湾：植民地政策の動態と知識青年のまなざし』あるむ、2019年に収録。